

## いのちの水

二〇〇六年

八月号

五四七号

あなたの重荷を主にゆだねよ、主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え、とこしえに動揺しないように計らって下さる。(詩五五・23)

決して消えないもの、引き抜かれたりしないものがあることを知っている。

## 目次

- ・ 抜き取られることはないものとして
- ・ 風の道
- ・ 幸いの原因―詩編 三二編
- ・ ある日の思いから
- ・ 靖国の混乱
- ・ ことば
- ・ 休憩室
- ・ お知らせ
- ・ 編集だより

抜き取られることはないものとして

私たちは、いつかはこの世界からいなくなる。植物でいえば、枯れて引き抜かれる。あのようになよい人がどうして若くして逝ってしまったのか、いつまでも生きていてほしいと願うような人も次々といなくなっていく。

この世では、良きものも、時がきたらいつのまにか変質したり、消えていく。

人間同士の関係も、どのようにな親しく信頼しあっているようでも、ふとしたことから壊れることがある。どうしてそのように受けとるのか分からないような誤解が生じてしまうこともある。

旧約聖書の古い時代から、か

つて「共にパンを食べた者、神への礼拝に加わった者」であったのに、全く態度が変わり、自分を攻撃するものになった、という哀しみの心が次のような詩となって残されている。(詩編

五五・14、15も参照)

：わたしの信頼していた仲間わたしのパンを食べる者が威張ってわたしを足げにします。(詩編四一・10)

このように人間同士の友情も思いがけないことから簡単に抜き取られることがある。

しかし、それはこの目に見えない世界での出来事である。目に見えない世界があるということ、を本心に信じる者、そのような世界を実感する者にとっては、

旧約聖書には、いろいろな預言者が現れる。その預言が、記述された文書となっている最初のものであるアモス書の最後の言葉は、次のようなものである。

：わたしは彼らをその土地に植え付ける。わたしは与えた地から再び彼らが引き抜かれることは決してないよ

あなたの神なる主は言われる。(アモス書九・15)

アモス書全体は、神の強い警告であり、真理に背き続ける人々や国々への裁きの予告である。預言者アモスは、羊飼いであった。宗教家でもなければ、学者や社会的な指導者でもなかった。しかし、神はそのような全く社会や国家の動きとは関係のない人をも呼び出して、鋭い真理を示されている。



その預言書の最後が、このように決して引き抜かれることはない、という確信の込められた預言で終わっていることは、現代の私たちにも強く語りかけるものがある。

アモスとは、今から二七〇〇年以上も昔の預言者である。そのような古い時代から、神の民はさまざまの裁きや苦難を受けながらも、最終的には神の力によって回復される。そしていかなるものもその祝福を取り去るものはないという確信が記されている。

このような、不滅の希望と確信は、聖書が一貫して私たちに伝えているもので、新約聖書にあっては次のように言われている。

：わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。(ヨハネ福音書十・27)

イエスを信じて救い主として受け入れる者には、永遠の命が与えられる。それは神の霊的な畑に植えられたと言えるであろう。それゆえに、そこから抜き取られることはないという約束なのである。この世の闇の力は、イエスをも抜き取るうとして、

さまざまの悪意を重ねてイエスを神を汚したという罪を作り上げ、十字架で処刑してしまった。目に見えるもの(体)は、この世から確かに抜き取られてしまった。しかし、イエスは復活し、神が植えたものはいかなることもあっても、抜き取られないことが明らかになった。そして以後の二〇〇〇年の歴史は、世界中の人々にそのことを証明してきた。

このような確信は、さらに使徒パウロの次の言葉にも現れている。

：だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましよう。艱難か。苦しみか。

迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

私たちは確信しています。死も支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも：いかなる被造物も、私たちの主、キリスト・イエスによって示された神の愛から、私たちを引き離すことはできないのです。(ローマ信徒への手紙八・35、39より)

だれでも、この世に生きていく過程で、さまざまの出来事や病気や老齢化のゆえに、よきものが次々と抜き取られていく哀しみを味わうであろう。

しかし、私たちが主イエスというぶどうの樹につながっているかぎり、私たちの魂は決して抜き取られることはなく、この霊的宇宙に永遠に植えられたものとなり、神のいのちと愛のうちにとこしえに置いて頂けるといえることは、他には代えることのできない希望である。

## 風の道

台風が四国沖を通過したとき、近くの小さい谷川を歩いた。そこには、風が止むことなく吹いていた。その谷川のところから、三つの方向に細い山道が続いていた。しかし、涼しい風がたえず吹き続けているのは、その一つの道だけだった。

その小道の両側は、樹木の整った山が迫っており、またその風の吹いてくる方向は、二〇〇メートルほどの高さの山の稜線へと急な山道が続いている。

風が吹くにも樹木や前の山に妨げられて吹いて来ないようなところであった。

しかし、不思議なことに、その小道は、風の道でもあった。そしてかたわらには、小さな谷に水が流れていた。

三〇度を超える暑さに毎日閉口していたとき、思いがけないこの風の涼しげな道にしばしたずんだ。

この小道と風は自然に祈りへ

と導いてくれるものであった。

低い山の登り口でほとんど平地の道で、このように真夏に涼しい風が、しかも何かがそれを引き寄せるように吹き続けるといふのは、珍しいことであった。真夏とは思えない、どこか高原の風を受けているような、久しぶりの心地よさのなかで、天の風もこのように、ある道にはいつも吹いているのだらうと思っ



### 幸いの原点―詩編32編

人間はだれでも幸いを求める。人間にはいろいろの幸福に関する考えがある。しかし、大多数の人たちには共通している。この世には実にさまざまの人がいて、考えられないような行動にはしる人たちもいる。しかし、わざわざ苦しい病気になるう、などという人はいない。それはどんな人でも、苦しくて痛みの激しい病気などなりたくはない、それは幸いなことでないということでは一致しているからである。

こうしたことからすぐに分かるように、人間の幸いには健康とということが不可欠だということ、ほとんどどんな人、いかなる民族や年齢にも関わらず、共通しているといえよう。このような一般的な常識に対して、聖書は驚くべき見方を

「幸い」ということに対して持っている。

それは、健康が人間の幸いに不可欠であるといった表現は全く見られないということである。このことだけとつても、いかに聖書が一般的な常識と異なる視点から書かれているかを思わせる。

何が幸いだと言っているのか、それは聖書全体がいたるところで告げている。ここでは、その内で、旧約聖書の詩編に記されていることから、見てみよう。以下の引用は、詩編三十二編である。

なわ、この詩は古代から多くの人たちに愛されてきた詩である。アウグスティヌス(\*)は、

この詩を特別に愛して、死の近づいた重い病気のときに、自分のベッドの近くの壁にこの詩を書かせていたということである

し、ルター(\*\*)も悔い改めの詩編として、この詩編とともに詩編五七、一三〇、一四三をあげ、それらのうちで、この詩編

三二が最もよいものだと記して「SAYINGS」(THE INTERPRETER'S BIBLE) Vol. IV (168頁)

(\*) A.D. 三五四〜四三〇年。初期キリスト教最大の思想家。「告白」三位一体論「神の国」などの著作で有名。

(\*\*) ルターは、ドイツの宗教改革者。(一四八三〜一五四六年) 聖書を深く読んだルターは、カトリック教会の特に贖宥状(しよくゆうじょう)、免罪符とも訳されてきた)等に関する不合理を知って、一五二七年に抗議書九五カ条を公表、歴史上できわめて重要な宗教改革の始まりとなった。彼は、新約聖書に基づいて救いは行いによる信仰のみによることを強調した。一五二二年、聖書のドイツ語訳を行い、音楽を愛し、多くの讃美歌をも作った。

いかに幸いなことか。背きを赦され、罪を覆っていただいた者は。

いかに幸いなことか。主に咎を数えられず、心に欺きのない人は。(旧約聖書 詩編 三二・1〜2)

「いかに、幸いと云うことが、罪を赦されることである」とは「きり」と示されている。正しい心



は分かりにくい。「骨まで朽ち果てる」などといった表現は、現代の文章や会話では、だれも目にすることも使うこともないだろう。今日の私たちには全く違和感がある。

これは、旧約聖書では、骨はからだを支える中心にあるものだから、体の奥深くというニュアンスがあり、ここでは、体の奥まで消耗し疲れ果てた、といった意味なのである。

つぎの英訳の方が分かりやすい。

When I declared not my sin,  
my body wasted away through  
my groaning all day long.

(Ps7)

「私が罪を告白しなかったとき、一日中うめき苦しんで、私の体は、弱り果てた。」

そしてその苦しみは、神が私を苦しめているのだと感じた。植物が夏の日照りにあって枯れるように、私の力も失せてし

まうほどに衰え、弱ってしまっただ、という。そしてそのような苦しみは、この詩の作者が自分の罪を深くわからずに、神に告白することもしなかったゆえであった。

ここに、人間の深い苦しみは、だれかによって苦しめられるとか病気の苦しみ、水や食物のないこと、戦争などの苦しみなど以外に、より深いところ、すなわち自分自身の奥にある罪に気付かないところからくるという見方がある。

たしかに、自分の罪を深く知らないときには、他人すなわち家族や周囲の人、あるいは世の中の人間、政治や時代が悪いからだ、と考えたり、金がないからだ、など自分以外のところから原因があると考えてしまう。そこからは神に真剣に求めることがない。他者への非難の心、裁く心や、体の病気のいやしだけを求める心が奥にあるからである。

このような心が内に潜んでい

るかぎり、私たちには深い平安がない。

このことに気づき、罪を告白することで、初めて心の平和が訪れる。そのことをこの詩はみずからの経験として記している。

：わたしは罪をあなたに示し  
咎を隠さなかった。

わたしは言った。

「主にわたしの背きを告白しよう」と。

そのとき、あなたはわたしの罪と過ちを  
赦して下さった。(5節)

ここに、この詩の作者の決定的な転回点(ターニング・ポイント)がある。

人間の決定的な問題は、進学でも、就職や結婚でもない。特定の思想を持つことでもない。何かの賞をもらうことでもない。

この詩の作者と同様に、自分の罪を知り、そこから神へと心の方向転換をなすことなのである。

罪とは正しい道からはずれている状態であるから、究極的に正しい道が何であるかを知らないときには、罪をも感じない。すなわち、時代が変わり、周囲の状況がいかに変わっても変ることのない、真実や正しさ、あるいは愛といったものを知っているでなかったら、罪を深く知ることができず、単にこの世の法律的なことに反しているかどうかしか分からなくなる。

そうした永遠に変わることなき真実な存在とは、宇宙を創造された神であるから、そのような神を知らないとは罪も分からない。

そして人生の最大の転回点を得るためには、経験とか知識、金などのようなものは何も必要なものはない。ただ、心の方向を転換するだけでよい。この魂の方向転換こそ、この詩が作られた時代から後になつて、主イエスが伝道の最初に強調したことであった。

：神の国は近づいた。悔い改め

て福音を信ぜよ。(マルコ福音書一・15より)

神の国とは神の愛によるご支

配であり、どんな罪をも赦すことのできる力、すなわち罪の力をも支配するような神の力が近づいてそこにある。だから方向転換をせよ(悔い改めよ)、そしてこの喜ばしいおとずれを信ぜよ、と言われたのである。

その意味で、この詩は、ダビデのものとするればキリストより千年も昔に作られたものでありながら、すでにキリストが宣べ伝えた福音の本質を語っていると言えるのである。

旧約聖書の古い時代では、祭司が牛や羊を殺し、その血を注ぐことによって赦しを受けるとされた。このように、キリスト教の核心である、罪の赦しということは、初めてキリストが言い出したというようなものでなく、とくに詩編においてこのように、罪赦されることごどんなに大きな幸いであるか、それご

そが人間の与えられる最大の幸いであることを早くも経験を通して、また啓示を受けて知らされていたのである。

その罪の赦しの福音は、イスラエルの特に啓示を受けた人たちの心の深いところを流れ続けていたが、それがキリストによって完全なものとなった。すなわち、イエスが十字架にかかることによって、そのことを罪の赦しのためと信じる人はだれでも罪の赦しが受けられるという福音となり、特定の民族のものではなく、全世界の民族に与えられた福音となった。そしてこの真理の流れは、永遠の流れとなって現在に至っている。

…あなたの慈しみに生きる人は皆(＊)

あなたを見いださうる間にあなたに祈ります。  
大水が溢れ流れるときにもその人に及ぶことは決してありません。

あなたはわたしの隠れが。 昔

難から守ってくださいる方。 救いの喜びをもって

わたしを囲んでくださる方。

(6〜7節)

(＊)「あなたの慈しみに生きる人」とは、原語(ヘブル語)では、ハ・シードという語で、ヘセド(慈しみ)という語と関連した語。「敬虔な者」(関根正雄訳)、「神を敬う者」(山口語訳)、「聖徒」(新改訳)と訳され、英語では、pious(真実な、忠実な)(NRS, NJB)という語を用いて訳するのが多い。

罪を深く知らされ、その罪を神に告白することによってこの詩の作者は、長い苦しみから解放され、新しい祈りの生活へと移されることになった。その祈りによって、罪赦された魂は、絶えず新たな力を受けていく。それゆえに、この世の悪意や攻撃、病気やそのほかの苦難など、人生の大水が襲いかかっても、その人の魂の深みには達することがなく、おし流されることがない。

絶えざる祈りによる生活は、神の守りをつねに実感することができる。それゆえ、「あなた

こそは、わが隠れ家」と言うことが出来る。

それだけでなく、この悪の広がる世において私たちも悪の力に覆われそうになるが、この詩の作者は、その間のただなかで、救いの喜びで囲まれている、という実感を持つことが出来るようになった。

…わたしはあなたを目覚めさせ行くべき道を教えよう。  
あなたの上に目を注ぎ、勧めを与えよう。(8節)

救いの喜びが取り囲んでいるといえるまでに、救いの確信を与えられたとき、その事実を他者に伝えずにはいられなくなる。それがこのように、隣人に対して、このような救いの世界があるというところに、目覚めてほしいとの願いをもって勧め、その救いに至る道を証しするようにと導かれる。

他の人に救いはここにあり、と確信をもって指し示すことが

できるためには、本人がそのような深い救いを与えられていなければできない。罪赦されたという救いの深い体験こそ、この詩の作者の原点となり、他者をも教え導くことが自然になされるようになったのである。

… 神に逆らう者は悩みが多く、主に信頼する者は慈しみに囲まれる。

神に従う人よ、主によって喜び躍れ。

すべて心の正しい人よ、喜びの声をあげよ。(\*)

(\*)「神に逆らう者」とは、原語では「ラーシヤー」であり、これは、「悪い」という意味を持っているので、英語訳では「ワイルド」(悪)と訳され、他の日本語訳聖書では、「悪い者」「悪根」「悪者」「悪改」と訳される。新共同訳では、「悪い」とは、「神に逆らうこと」だ、との解釈から、「神に逆らう人」というように訳してある。

「神に従う者」と訳されている原語は「サッデーク」であって、「正義の、正しい」という意味が本来であるから、「正しい者」「悪根」「正しい者」「口語訳

新改訳」と訳され、英語訳聖書では、*righteous* という訳語をあてているのがほとんどである。

「喜び躍れ」と訳された箇所、原語の表現は、「躍る」という語は含まれておらず、「喜ぶ」という意味の二種類の語が使われている。それゆえ、悪根訳は「ヤハツ」であって喜び、悦べ」と、二種類の「よろこぶ」という意味の漢字を用いて訳し、口語訳、新改訳は、「主にあって、喜び、楽しみ」と訳している。英語訳でも、*Be glad in the LORD and rejoice, O righteous,* のように、*be glad rejoice* の二種類の「喜ぶ」という意味の言葉をもちこんでいる。

この詩の作者は、苦しい人生の経験を通して、何がこの世で根本問題であるかを深く追求して自らの魂において実感したことを記している。それは、最終的に悪しき者、神に逆らう者は、苦しみ悩みから去ることはできないが、主に罪赦され、そこから主に従っていく者は、この暗い世においても、慈しみに囲まれる、と断言することができたのである。

すでにこの前にも、「主は救いの喜びをもって、私を取り囲んで下さるお方!」との喜ばし

い声をあげたのであったが、さらにもう一度、主に信頼する者は「慈しみに囲まれる」と強調している。このように、二度までも、慈しみや、喜びで囲んで下さる、という体験的な事実を証しているのである。

「とにかくに、この詩の作者がこのことを大きな体験として受け止めているかがうかがえる。

このように、絶望的な苦しみと悩みにさいなまれていた一つの魂がいかにして、そこから解放されていくのか、解放された人は、さらにどのようなところへと導かれていくのかをこの詩は鮮やかに示している。

暗闇や疑い、苦しみのもと、自らの罪にあり、それに気付かないところがあり、それが取り除かれぬゆえに苦しむのであった。そこから目覚めて、罪を知り、神に告白するとき、救しを受けた。

この詩の作者にとって、罪が赦される、という言葉そのものはなじみ深いものであったであ

ろう。イスラエル民族は世界で最初に、唯一の神が存在することを知らされた民族であり、動物の血を注いでする罪の清めの儀式は広く知らされていたであろうからである。

しかし、言葉の上で知っている、聞いたことがある、儀式は知っている、ということと、実際に罪の赦しを受けるといふことは全く異なることである。罪赦されて初めて神は愛であり、愛の神だと分かる。しかし、単に言葉のうえで知っていても、聞いたことがあっても、それでは神の愛は分からない。

この詩の作者は、みずからの魂のうちでなされた深い実感があって、初めて罪の赦しということがいかに大きなことであるかを悟ったのであり、そこに最大の感動を覚えたゆえに、このような詩を書かずにはいられなかったのである。

新約聖書において、罪の赦しと神の愛は、つぎのように深く

関わっていることが記されている。

放蕩息子が、父親の財産をもらって遠くに行ってしまった、それを遊びに使い果たし、食べ物もなく、生きることも難しくなった。そのとき初めて自分の大きな罪を知り、どんな仕打ちを受けてもかまわない、方向転換をして父のもとに帰ろうという気持ちになつて帰途についた。家に近づいたとき、父親は、走り寄ってその放蕩息子を首を抱いてこのうえない喜びを表し、よい服を着せてさらに子牛を料理しかつてしたことのないごちそうを与えた。それは「死んでいたのに生きかえったのも同然だから」という理由からであった。

最も深くわかっておられた主イエスが自身の思いでもあったであろう。

さらに、この放蕩息子のたとえの直前に記されているのが、やはり悔い改め(神への心の方角転換)がいかに、神の世界にとって大きな喜びであるかということである。

それは、羊の一匹がいなくなつたとき、九九匹の羊をおいてその一匹を探しまわるだろう。それを見つかったら、友人や近所の人たちを呼び集め、共に喜んでくれ、と言うだろう。悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要などないと考えている九九人の人たちについてより大きな喜びが天にある。

また、銀貨一〇枚を持っている女が、一枚の銀貨をなくしたとき、見付けるまで探しまわるだろう。見付けたら、友達を呼び集めて、「なくなっていた銀貨を見付けた。ともに喜んでください」というだろう。このように、一人の罪人が悔い改めた

なら、神の天使たちの間に喜びがある。(ルカ福音書十五章より)

これらのたとえで、主イエスは、罪からの悔い改め(神への方向転換)が、人間にとって根本的に重要であることを示し、それゆえに、その罪を告白し、心の方向転換をした人には、神も天使たちも特別に大いなる喜びがあると言われた。

そして、この喜びこそは、詩編三二編の後半で強調されている次のような喜びに通じている。

：あなたは、救いの喜びをもつて私を囲んで下さる方

：主に信頼する者は慈しみに囲まれる。

：神に従う人よ、主によって喜び、悦べ。

すべて心の正しい人たちよ、喜びの声をあげよ。(詩編三二：7、11より)

神は、このような喜びを(これがダビデのものとするれば)主イエスより千年ほども昔からす

でに、一部の真実な信仰者に与えていた。それが、一種の預言となり、このような喜びの世界があるのだということが、ずっと指し示されてきたと言えよう。

そして主イエスが、その悔い改めと罪赦される喜び、さらにそこから聖霊が与えられ、新たな力が与えられて生きるという道を完成させ、以後の人類の歴史を通じて大いなる道として開かれたのであった。

ある日の思いから

待ち望む

待ち望む。真実がそのまま真実として受けとられる時を。

真実を言っても、真実な心でも、疑われ、まったく異なることを言われるようなこの世。

主イエスは、神からの言葉を語った。

だが、多くの人たちから受け入れられず、神を汚す者、悪霊の力でやっていると言われた。





長い歴史、それはこのような無理解で満ちている。

幼な子のような心、それが一番重要だと主イエスは言われた。

それは、まっすぐに真理そのもの(神)を仰ぐ心、まっすぐに受けとめる心。

神は、私たちの小さくとも真実な心をそのままに受けとって下さる。

なんとありがたいことだろう。

そのような真実が伝わる世界を待ち望む。



キリストの奥に

誰も知らない。

キリストの奥にどれほどの平和があり、

どれほどの愛があるかを。

「父のほかに子を知るものはいない」とイエスは言われた。

その限りなく深い海のような、キリストの平和と愛、

私たちが受けとってきたのはそのわずかな部分なのだろう。

主よ、その満ちみちたものの中から、

さらなる恵みを私たちに注いでください。

水と風のように

水のように、あるいは風のように流れていきたい。

水も風も、さまざまのところに通っていく。

妨げられても、わずかなすき間から、流れていく。吹いていく。

私の分身が、どんなさままたげに出会ってもそれらを貫いて流れていけばよい。

主によって砕かれた私が、さまざまの壁をも通り抜けていけばよい。

主イエスが初めてユダヤ人の会

堂で語られたとき、

その真理を真っ向から反対し、崖から突き落とそうとする人たちが現れた。

しかし、イエスは、そうした人々とその敵意を風のように通り抜けて行かれた。

真理は、あらゆる壁をも通り抜け、吹いていく。

動かすもの

世の中がどのように変わっていくこととも

変わらないものがある。

私を数十年前に、その魂をとらえ

そしてさまざまの罪を犯し、足りない者であるにも関わらず、

強い御手で導かれた何者かがおられる。

自分の考えでもない。身近な者の影響でも、世間に流されたのでもない。

ただ、見えざる御手が私を引いて下さった。

そして今日のところまで、歩ん

でくることができた。

そのような力がある。それを私は知ってもらいたい。

その力を知ることこそ、この世に生れた意味を知ることになるのだから。

生きる意味が分からないという人、

かつては私もそうであった。

なぜ自らの命を断ったらいけないのか、

その理由が分からないという。分らない、つきつめたら他のすべても分からないことばかりだ。

なぜ、こんなに悩みがあるのか、

どうしてこんなに悲しむべきこととがあるのか。

どうして罪を犯すまいと思っても罪から離れられないのか、

なぜこんなひどいことをする人間がいるのか、どうして破壊と分かっていることをするのか。

どうして、戦争や犯罪、テロが

絶えないのか。

なぜ、この地球が存在しているのか、

いつか、これは消滅するという。そのとき、人はどうなるのか。どんなに考えても分からない、こうした問題の解決はだれも知らないのだと思つた。その疑問、難問、回答不能のよなこの世にあってただ一つの道が通つていた。そうした疑問や心を暗くする問いかげが、氷の溶けるようにその重苦しさが消えていく道がある。

私はかつてこうした重い問いかけを持って、どうすることもできなかった。しかし、そうした一切のからみつく暗い力を打ち破る力があり、はるか昔から、永遠の未来へと通じている道があるのを知らされた。

今も、その道は通っている。そして神の国への旅路を歩む人たちが次々と見えてくる。遠い御国へとどこまでもその歩む人たちは続いていく。私たちはそのうち目に見えるすべてを失っていく。

この道は、自分に何もなくなつた時でも、不思議にも歩んでいける。何も持たないでも、この旅はどこまでも続けていくことができると。

見えない手によって引かれ、この世のものでない翼を与えられ、内に神の言葉という永遠のエネルギーを貯えているから。清くないものにも人間は弱く、真実に反することがあまりにも多い。しかし、そのような人間に、神は驚くべき真理を与えた。真理が与えられても、なお、人間は変わらずに自分中心であったりする。

しかし、それでも神はそのような人間に神の国の大いなる賜物を預けることがある。キリストの十二弟子たちは、主がとらえられるときには、みんな逃げてしまったし、弟子の代表ともいふべきペテロ

は三度も、イエスなど知らないといつて激しく否定した。そのような自分中心の汚れた者に、尊い神の力、悪霊を追いだす力、病をいやす力など与えられるはずはないと思うだろう。しかし、キリストは、そのような弟子たちの最初の派遣のときから、すでにそうした驚くべき賜物を与えていた。

神にとつては、どれほど人格を磨いたか、どれほど経験を積んだか、いかに強い信念があるか。等々は問題ではない。どんなに不十分であっても、主イエスは、そのご計画に従つて、思いがけない人を呼びだされる。どんなに未熟でも、不十分でも、罪の赦しを受け、イエスに従つていきたいという小さな願いがあれば、主はそうした人をも用いられる。否、敵対していたような人間も用いる。

私もごく不十分な者でしかない。それでも、たしかに主はその大いなる賜物の一部を委ねて下さつた。

これからのようなことが起きるか分からない。人の心は変わりやすく、動きやすい。しかし、父なる神だけはいかなることがあつても、私を見放すことがない。

そしてそのように信じて神のもとに行こうとする人は誰でも、拒まれることはない。

神とキリストだけが、究極的に変ることのない道であり、命なのだ。

靖国の混乱

前回に続いて、重複する内容もあるが、再度靖国問題について考えてみたい。

「靖国」という混乱とは、靖国神社が、戦死者は誰であっても神であるとし、それを崇敬の念をもってすべし、という発想のことである。戦争でどんなひどいことをした者でも、一律に神と成り、崇拝される対象となる、などということは、善悪の根本



を混乱させることである。

中国との十五年にわたる戦争、太平洋戦争などで日本人がどのようなことをしてきたか、何ら攻撃もしていない農民たちを襲い、食物を奪い、また女性を襲い、家に火をつけて焼き払う、南京の虐殺のことがよく言われるが、上海などの大都市に対しても大規模の空襲がなされた。戦争そのものが、本質的に虐殺を目的としていることなのである。

沖繩においても、日本の軍人が多くの沖繩の人を助けずに、かえって死においやったことはよく知られている。そのような数々の悪事をしてきた人、それらをみんな一律に、神として敬え、ということとは、そうした悪事それ自体を敬まっているような錯覚に陥り、善悪の観念、罪の感覚がマヒしていくことにつながる。

すでにこのようなことは、一九二〇年「中央公論」において、はっきりと気付いて指摘してい

た、吉野作造のような学者もいた。

「何んなやくざ者でも戦争で死にさへすれば以前の罪は全部帳消しになつて神様になれる、少くとも戦争で死んだだけといふだけでやくざ者を神として宗めるといふ事は、少くとも平和時代の良民を薰陶する所以ではない。」

靖国の宗教的混乱は、次のような点にも見られる。

この神社の出発点は、江戸時代の終り頃(一八六二年)京都東山で、幕府と戦って死んだ尊皇攘夷派の武士たちの魂を招いて、慰めたということにある。人間がある種の儀式をして、死者の魂を靖国神社に呼び出す、などということ信じるといふことから出発している。そのため、靖国神社の前身は「招魂社」と言っていた。

このような、目に見えないものを、簡単に特定の間が儀式で呼び寄せたのだ、といつても

もちろんそんな証拠はどこにもない。ただ、その儀式をやっている者が、呼び寄せた、というのを周りの人が信じているだけなのである。

人間は本来自分の心すら自由に動かせない。そのような儀式をする人間も一人の弱い人間にすぎないのであって、自分の心も自由にならないだけでなく、他人の心をも到底支配できない。ある人に自分を愛するよう、あるいは自分を尊敬するようになせよう、などと考えてもとてもできないことである。

そのようなこともできない人間が、死んだ人間の霊を呼び出したりできる、というようなことを信じるといふのは、いかにも不可解なことである。

招魂社は、天皇側について武士たちが、志半ばで殺されたために彼らの「魂を招いて慰霊をする」ということがそもそもその目的であったが、それと共にもう一つの意味が付加されていった。それは、呼びだされた霊は、

単に嘆いていてのではない。国民を教化し、国を護るような神々になったのだということにされた。

慰霊ということとは、特別な死に方で天皇の側に立って戦ったのに、不当に殺された。だからその霊は嘆き悲しんでいる、あるいは怒ったり、うらんだりしているということになる。そのような魂を放置していると、生きている者にもたたくてくる。だからそのような霊を慰めることが重要だとなってくる。それが「慰霊」ということである。

しかし、そのような怒ったり、嘆いたりしているだけの魂ならば、国家のためには使えない。そこで、そうした魂は、国を護る力をも持っている神なのだというにされた。靖国神社の地方社という性質をもっている、全国各地の護国神社という名称はこうした国を護る、とされたためにその性質をその名前にはっきりと示している。

靖国神社という名称も、日本

ではもともと、「安国」という用語を用いていたが、これは日蓮系の仏教で用いていることや、寺の名前にも使われているので、あえてこれを使わず、中国の古典(「春秋」の左史伝)の、「吾以て国を靖んずるなり」というところから採用したものであった。

このように、魂を一時的に招いた神社という素朴な名前から一転して、国家を安んじるといふ著しく国家的、政治的な名前になった。このように、靖国神社の出発点から、天皇のために戦って死んだ者を神として祀る、という政治的な色合いが著しい神社であったが、それがさらに、明治維新の戦争のような内戦から、外国との戦争の時代になって、他国との戦争において、天皇のために死んだ人々を神々として祀るといふようになっていった。

こうして、最初から、この靖国神社は、政治的な内容を深くもっていたのである。

それゆえに、太平洋戦争という最も重大な戦争が生じたときにも、この靖国神社がその戦争の遂行のために強力な道具とされた。靖国神社に神として祀るかどうかは、最終的には天皇が決める、そしてそこに祀られた場合には、天皇が拜んでくれる、この上ない名誉だ、ということになった。

戦争によって若い命を失った人、これはその相当部分が間違った支配者の命令で殺されたも同然であるのに、その悲しみをぶつけることもできず、天皇から靖国神社に祀られるという最高の名誉を与えられたのだと、感謝を天皇に捧げねばならない、ということになった。

このようにして、本来は戦争に対して反対する最も強力な力となるはずの、戦死者の家族たち、靖国神社や天皇に取り込まれて、それに対して批判、抗議するどころか、感謝すらせねばならない状況となった。

こうして靖国神社は政治に利用

され、国民を惑わす宗教的装置となった。それは現代においてもそうであり続けている。

靖国神社は誰でもどんな悪事をはたらいた者でも、戦死したものはみんな神になってあがめられる存在になる、ということだけでも、日本人の宗教的、かつ道徳的なあり方を混乱させてきたが、靖国神社に併設されている遊就館には、艦上爆撃機彗星や戦車、いわゆる人間魚雷と特攻ロケット、戦艦陸奥の副砲や砲弾、機銃、精巧な軍艦模型なども展示されている。こうして日中戦争や太平洋戦争が、正しい戦争であったという考え方が宣伝されている。

こうした様々の方向に影響を及ぼす靖国神社の問題はもとを正せば、すでに述べたようにその宗教観にある。

人間が勝手に死者の霊を呼び出すことができる信じること、しかもその霊が、たとえ殺人者であっても、国を護るような優

れた霊となり、神となっているのだ、などとする宗教的考えである。

そもそも靖国神社で祀られてきたのは、厚生省が特定の人間の名前を書いて、それを靖国神社に送付し、合祀のための儀式を行なったからそれで死者の霊が招き寄せられた、と信じているのである。靖国神社には、戦死者の遺骨・位牌などはなく、霊魂簿(れいじぼ)に氏名を記入してあるだけである。

靖国神社の神体としては、神鏡、神剣に加えて、祀られたとする人たちの名簿を霊魂簿れいじぼとして祀っている。

要するに、神として祀ってあるといっても、実質的には、ただ死者の名簿があるだけである。

こうしたいかにも人間的なやり方で、神社側は、二四六万もの人間の魂が神社に招き寄せられて神となっているとする。このような信仰が、日本の代表的な神社の一つでなされているのであり、何百万人がそこに参りに

行く。

しかし、魂とか霊といわれて  
いるものは人間の根源であり、  
特定の人間が何百万もの魂を簡  
単に左右するなど決してできる  
ものではない。生きている人間  
の魂をわずかの儀式で、だれが  
一体、千も万も動かせるであろ  
うか。

死んだ人間の魂を動かして、  
思うように特定の場に呼び寄せ  
るなど、本来こうしたことから  
考えると到底あり得ないことと  
ある。

生きた人間のたった一つの魂  
をすら、呼び寄せたりできない  
のに、生きた人間よりずっと得  
体の知れない、死者の魂、それ  
がどこにいるのか、そんな勝手  
な人間の思惑で招き寄せたりで  
きるという根拠も全くないのに、  
呼び寄せたりできるはずはない  
と言えよう。

靖国神社とは、このように、  
単に死者の名簿にすぎないもの  
を、儀式をして神体としてあが  
め、戦争に乗じて、虐殺などと

んな悪い行いをした人間であっ  
ても、それらの魂から何百万も  
の神々を造り出すという、実に  
奇妙な装置なのである。

このように簡単に人間を神と  
するのは、実は、現代に始まっ  
たことでなく、その最初からそ  
の傾向を色濃く持っている。

神道には、教典や教義がない  
が、古事記、日本書記が教典に  
準じるものとされてきた。「古  
古事記や日本書記の神話は、た  
しかに神道的な諸観念をよくあ  
らわしている…。古語拾遺や風  
土記も教典とされ…」(「世界  
大百科事典」)

それでは、古事記にはどのよ  
うなことが記されているである  
うか。部分的に省略しつつ口語  
にして引用しておく。

：最初の神々の一人である、  
イザナギの命が、黄泉の国から  
帰って「私は醜い汚い国に行っ  
たことだった。私は禊をしよう  
と思う」と言って、筑紫の日向  
のアハギ原にて、禊をした。そ

のとき、投げ捨てる杖によって  
現れた神は、フナドの神、投げ  
捨てた帯で現れた神は、ナガチ  
ハの神、投げ捨てた袋でできた  
神は、〇〇の神、投げ捨てる衣  
で現れた神は、〇〇の神、…以  
上フナドの神から〇〇の神まで  
十二神は体につけてあった物を  
投げ捨てたので、現れた神であ  
る。(「古事記上巻」より)

このように、汚れたと思つた  
衣服などを投げ捨てたものから  
次々といろいろな神が生じた、  
というのは、現代の靖国神社が  
明治維新の戦争以来、天皇の側  
について戦死したとみなした人  
間を次々と神々にしていったと  
いう発想と似たものがある。

要するに、神は簡単に生れるの  
であり、汚れたはずの衣服から  
も生じる。これは、中国との戦  
争、太平洋戦争などで罪もない  
中国などの人たちを殺したり奪っ  
たりしたような人でも簡単に神  
にしてしまう発想と似通ってい  
るのである。

それゆえに、明治政府にとつ  
て都合がよい場合には、特定の  
人間を神にしてしまう。明治政  
府が、豊臣秀吉を神だとして祀  
る豊国神社はどうか。

日本全国を統一した秀吉は、  
中国大陸までも支配しようと思  
え、そのためまず朝鮮に対して、  
日本に服従させようとし、秀吉  
の軍隊が朝鮮国内を通行するこ  
と、その道案内をするように要  
求した。

当然のことながら、朝鮮側が  
その要求を断ると、十五万の大  
軍を送りこみ、七年近い戦争を  
はじめたのである。(一五九二  
年〜一五九八年) この戦争で延  
べ三十万人ほどが日本から朝  
鮮半島に進軍し、侵略戦争をし  
たのであった。それによって朝  
鮮の国土と人々の生活は著しく  
荒廃してしまうことになった。  
秀吉没後に、神社が造られた  
が、豊臣氏が滅亡した後には、社  
殿が破壊されていた。しかし、  
隣国に対してこのような害悪を  
及ぼした人間を神として祀る豊

国神社を、明治の維新政府は、一八六八年(明治元年)、はやくもこの神社の再建を決定したのであった。こうして、特定の人間を次々に神として祀る先例を開くことになった。

この後、楠木正成を神とする湊川神社、藤原鎌足を祀る神社、織田信長を祀る神社、新田義貞、名和長年などを祀る神社など次々と明治政府の都合のよい人間を神として祀る神社を造っていた。

靖国神社に、大量の人間を次々に神として祀ることは、このよくな人間を神としていく延長線上にあった。

単に大木や岩、山々などの自然を神々としておるときには、そしてそうした周囲の世界に神秘的なものを感じていたのだ、と言っている間は、その問題点はあまり感じられないであろう。しかし、特定の人間を、政治的意図から神々とするときに、にわかには生々しい政治性を帯びてくる。投げ捨てるものからでも

神々が生じるというものであり、教典も教義もないとなれば、時代の状況によって特定の権力ある支配者が、都合のよいように神々を造り出すのは必然のことであった。

靖国神社の問題点は、戦死者が単に死んだのでなく、神々になったという点である。だから慰霊をするだけでなく、英霊として崇敬すべきものとなった、それゆえ首相までがその神々に礼拝に行くというから問題になるのである。戦前は、天皇が現人神であり、その現人神のお方が、死んで神々となった、戦死者をあがめるのだ、だから最高の名譽なのだ、とされるようになった。

これらすべては、このように死んだ者や生きた人間を神々と安易に作りだしていく発想にその原因がある。

神々ですら、簡単に造れるのだから、その神々を呼び寄せたり、その神々にどのような性質を与えるかということも、人間

が決めることができることとされてしまふ。

これが、太平洋戦争のときには、天皇を神とし、その神の名によって戦争を推進していくことにもなった。

キリスト教では、本来は武器をとる戦争ははっきりと否定している。旧約聖書では、神が戦いを命じることが記されているが、新約聖書においては、そのような武力による戦いは全面的に否定されている。旧約聖書に

は、キリスト教の中心である復活という信仰がまだ啓示されていなかったり、一夫多妻が当然のように書いてあったり、神への牛や羊の捧げ物をする、食べると汚れる食物がいろいろある、血を食べるな、出血の病気が汚れている、あるいは具体的な敵を攻撃することを祈ったりする等々、まだ神からの啓示が完全でなかったことがあちこちに見られる。

その旧約聖書の時代の後に、キリストが現れ、こうした不完

全な内容がすべて完全な教えと啓示へと高められたのであった。

敵は憎んだり攻撃したりすべきものでなく、その敵の心から、悪の力が追いだされ、その心が善くなるようにと祈るべきであり、死の力に勝利する復活があることを自らの復活で明らかにし、食物などによってはいっさい汚れることはない、汚れは特定の病気や死人に触れることなどによってでなく、人間がだれでも心にすでもってしていること、

それゆえに、キリストを信じることによってその汚れから清められねばならないこと等々である。

主イエスご自身が、剣をとる者は剣によって滅ぶと言われ、自ら武力ではいっさい攻撃せず、かえってあらゆる中傷、攻撃をすべて身に受けて、十字架にかかって死んでいかれた。そして使徒たちの働きを記した、使徒言行録においても、全く武力による戦いとか攻撃などは書かれていない。最大の使徒パウロも、

「私たちの戦いは、目で見える敵に対する戦いでなく、目に見えない、悪の力との霊的な戦いである。」と明言して、新約聖書では、武力の戦争とか攻撃は一切認めていないのは、調べればすぐにわかることである。

それゆえ、キリスト教が戦争をするのでなく、新約聖書とキリストの教えに従っていない人たちが戦争をしてきたのである。最近の靖国に関する議論のなかには、A級戦犯を分祀して、国立の追悼施設を造ろうという動きがある。

そして、その目的は、首相や、天皇が自由に参拝できるようにするためにという政治家たちがいる。もしそのような方向にいわば、人間、特に戦争で戦った軍人を神として祀るといふ特異な信仰が一層クローズアップされ、宗教的な混乱が増大するであろう。そして将来、平和憲法が改変されて、自衛隊が戦争に加わった

りしたとき、その戦死者を天皇が特別に敬うというようなことになり、戦争そのものへの批判が薄れていくようになるであろう。それは戦前のような方向である。そして靖国神社という、数百万もの人間の魂を呼び出すと称する特異な神社を重要視する傾向が強まるばかりになる。

しかし、重要なのは、国民一人一人が、戦争の計り知れない害悪をつねに新たに記憶し続け、思いだすことなのである。そのためには、日中戦争や太平洋戦争などの戦死者全体、日本人だけでなく、戦争に巻き込まれて死んだ韓国、中国、東南アジアの人々を記念する国立の記念の施設を設けて(単に悼む、悲しむという追悼の施設でなく)、宗教的な要素を除き、そこに首相や天皇が、平和祈念(記念)式典を、すればよいのである。わずかの例外はあっても、大多数は日本人の軍人の戦死者だけを神々として祀って崇敬するなどということから、問題が生じ

るのである。

そしてそれらすべての戦死者、犠牲者のことを心に刻み、平和を侵そうとするあらゆる動きに反対するための行事として、八月十五日を平和祈念日として、休日とするようにすればよいのである。

そしてより根本的には、人間を政治的な思惑で次々と神として崇拜する、という信仰から、脱却して、この世界、宇宙を愛と真実をもって支配されている唯一の神を信じることで、その愛をうけて、互いの罪を赦し合い、ともに神の愛を受けて生きることにこそ、さまざまの混乱をしずめ、真の平和へと通じる道なのである。

ことは



(24) 神を信じる人々にとって、すべての憂いが次第に消えて、その代わりに、ある確かな信念が生れる。

すなわち、一切のことが必ず

良くなるに相違なく、そして何ごとも、たとえば不幸にせよ、人の悪意や怠慢にせよ、自分の過ちにせよ、本当のわざわいをもたらずことはない、という信念がわいてくる。(「幸福論」第三部 ヒルティ著101頁)

この確信は、愛の神であって、かつ万能の神を信じるときに与えられるものだと見えよう。そのような神だけが、あらゆるこの世の悪しき出来事をも善きものへと変えることができるからである。

(24) われらキリスト教徒であって、遍歴の騎士たるものは、この世の空しい名声ではなく、至高の天国において永遠に続く、後の世の栄光を求めねばならない。この世の名声などは、いかに持続しても、定められた終りのあるこの世とともにいずれば滅び去ってしまうのだ。

したがって、我らが殺すべき

は(敵対する人間でなく)、たかぶり、傲慢、気高い胸にも宿るねたみの心、落ち着いた心にも宿ろうとする怒り、食事をとりすぎる(寝ないで番をする)ときの眠気、…さらに、われらキリスト教徒として、優れた騎士となさせて頂くための機会を求めて、この世の至るところを遍歴するときの、怠情である。

(セルバンテス著「ドン・キホーテ」後編第八章より) (\* )

(\*)セルバンテス(一五四七年〜一六一六年)の主著である、「ドン・キホーテ」は、聖書の次に世界的に出版されており、正真正銘のベストセラー小説だと言われている。二〇〇二年五月八日にノーベル研究所と愛書家団体が発表した、世界54か国の著名な文学者百人の投票による「史上最高の文学百選」で一位を獲得したという。(インターネットの辞典による)

このドン・キホーテという小説は、「近代小説の嚆矢(物事のはじめ)となる壮大な試みだったのである。」とされ、「ドン・キホーテ」のもつ深い意味が認識され始めたのは19世紀に入ってからで、その先駆者はシェリングやハイネであり、フローベールやリルゲ・ネフであった。「世界大百科事典」平凡社)

・一般の人には、この「ドン・キホーテ」という本は、風車に向かつて突進していくなど、単なる変わり者のことが書いてあるのだと思われていることが多い。しかし、この書は、決してそのようなものでなく、キリスト教の深い真理を内に秘めた作品である。スイスのキリスト教思想家 ヒルティも、この作品について「真理をユーモアの衣を着せて述べることはとくに困難なことであるが、セルバンテスの作品はこれを成し遂げている」と高く評価している。

ドン・キホーテは、「遍歴の騎士」であるが、これは、この世を神の国を目指して旅していく者を象徴しており、その過程で、戦いが必ずある、それを騎士ということでは表している。その戦いとは、ここに引用したように、悪人そのものを殺すことではなく、私たちの内に宿る妬みや怒り、高ぶりなどであり、飲食などの欲や、なすべきことが

できるのに、しようとしめない意欲の心との戦いであり、霊的な目を眠らせようとする悪の力に對するものだと言っているのである。

つねに霊的な目を覚ましていることの重要性は、主イエスが繰り返し警告されたことであり、私たちの戦いは、血肉に對するものでなく、霊的な悪の力との戦いであるということも、エペソ書において詳しく記されている。

なお、次のような言葉もある。

「お前がだれと歩いているか、言ってみろ。お前がどんな人間か言ってみろ。」

「お前が誰のところで生れたかじゃない。誰と一緒に草を食べているか、だ。」(同右第10章より)

キリスト者とは、今も生きて働いておられる、主イエスとともに歩み、イエスとともに霊的なパン、神の言葉を食べている

者だと言えるが、ここに引用した言葉はそのことを指していると言えよう。

### 休憩室



○先日、裏山の小さな谷川沿いの朝に歩く道で、ハンミョウという昆虫を、数十年ぶりに見ました。これは、タマムシと並んで、特に美しい昆虫として知られています。小学校のころ、私の家のある標高二〇〇メートルほどの日峰山で時々見かけたものですが、最近はどこにおいてももう長い間見たことがなく、私の住んでいる付近では絶滅したのかと思っていたほどです。しかし、どこでどのように生き延びてきたのか、ただ一匹だけがその美しい彩りをもって私の前にいたのです。子どものとき、とらえようと思っても、近づいたらすぐにごく身軽に2メートルほど前に飛んでしまうので、素手ではとてもつかまえることが難しかったものです。



背に橙赤色の十字状の区切り模様があり、その両側は濃い紺色、そこに白い斑点の模様があり、それらが光沢をもっているので、誰しも見た人は思わず目を留めるような昆虫です。

このような見事な色彩、模様をどのような目的があって創造主は造られたのか、と思うとともに、絶滅したように思われたものが、現れることの不思議さを感じます。

このような不思議は、植物にはさらに多く見られます。この付近では全くないと思われていた植物が、一つだけ芽ばえているとか、それが成長しているのに出会います。たぐさんの種が生じてもほとんどは芽生えないけれども、近くにまいったくそのような植物がないのに、意外なものを見付けることがあります。

私たちの心のなかにも、長い間、浮かんだこともないことがある時突然心に浮かんでくる、ということがあります。これは、神が私たちの心のなかに投げ入

れるのだと言えます。

インスピレーション

(Inspiration) という言葉が

ありますが、まさに、スピリット

トスピリット(霊) (\*) が私た

ちの心に入り、動かすわけです。

もうだめだ、と思われるよう

なことが続いても、神に期待を

かけることができます。神は無

から有を生じさせることができる

のだから。

何十年も希望の光がなくなっ

ているような人の心の中にも、

神の力によって、光がそこに突

然現れるようになって欲しいと

願います。

(\*) spirit という言葉は、ラテン語の, spiritus(スピリト)から来ています。この言葉は、本来は「風が吹く」という意味を持つ言葉であり、人間も生きていくときは、一種の風(息)が入り出している、「息」という意味にもなり、さらに、息がなくなると、死ぬので、「生きていく」という意味もあります。そこから「霊感を受ける」というようにも使われます。その名詞形が, spiritus(スピリトゥス)で、「風」「呼吸」「命」「霊、魂」といった意味を持つ言葉です。

お知らせ

○「祈の友」四国グループ集会

九月十八日(月) 休日(敬老

の日)に、松山市のJR松山駅

前の「スカイホテル」にて。午

前十一時開会。会費千円。問い

合わせは、松山市の二宮千恵

子氏。TEL 050-1288-8075

○九月二三日(土)〜二四日

(日) 吉村(孝)は、静岡市

に出向きます。

一四日(日)の静岡での会場

は、「清水テルサ」(勤労者福

祉センター)の7階会議室 C

です。JR静岡駅東口から

徒歩 7〜8分。開会は、午前

十時より。連絡先 清水聖書集

会の西澤 正文氏 TEL 0543-

83-0456

○貝出久美子さんの詩文集

第八集「十字架からの風を受けて」

59頁。残部がありますので、希望の

方は申込あればお送りします。一

部 一五〇円(切手でも可)。送料

は当方負担します。

○聖書講話、礼拝の録音CD

今までには何度か紹介しました

が、最近も数人の方々から問い

合わせ、申込がありましたので書

いておきます。ヨハネ福音書CD

(約58枚)をブック型ケース入りで、

希望の方にお分けしています。こ

の内容は、二〇〇〇年の六月十

八日から二年半ほどの期間で、

徳島聖書キリスト集会でなされ

た吉村 孝雄による聖書講話の記

録です。これは、テープに録音

されていたものを、デジタル化し

てCDという形で聞けるようにし

たものです。(なお、一部の録音

テープが欠けていたりしたため、

それらはこのCDに収められてい

ないのもあります。)

このCDは、音楽を聞くための

普通のCDラジカセで聞くことが

できます。価格は、CD、ケース

送料共で、一万円。申込は、メー

ル、電話、はがきなど。

○毎週日曜日の主日礼拝と火曜

日夜の夕拝の内容をそのまま録音したCDも希望者にお分けしています。これは、聖書講話だけでなく、祈りや讃美、感話なども含んだもので、テープでは、八、十本になるのですが、MP3ファイルにしてあるので、CD一枚にこれらが収まっています。パソコンで使うと最も便利に使えます。これは、普通のCDラジカセでは聞けません、DVDプレーヤー(ただしMP3対応のもの)などでも聞くことができます。

○北田康広さんの新しいCD  
全盲の歌手、ピアノ奏者である北田康広さんのCDが八月二日に発売されたことは前月号でお知らせしました。

北田さんは、私(吉村)が高校の理科教員から希望して盲学校(高等部)に転勤したとき、担任したクラスにいた生徒で、音楽に特別な才能があり、聖書にも関心を持っていたので、放課後など、しばしば音楽とキリスト教の関わりや、聖書の内容などについて話したり、集

会にも連れてきたことがあります。わが家にも来て、ベーター・ベン<sup>ベーター</sup>の熱情ソナタを引いてくれたこともありました。

その内容について、CD付録の記述をも引用して少し詳しく紹介しておきます。

曲目順に説明します。(1)「一つだけの命」これは、二番目の曲目である「さとうきび畑」の作詩・作曲者として知られる、寺島尚彦の作詩作曲の作品。「空は星たちの遊び場だから、戦いのための炎が焦がしてはならない、…海は命のふるさとだから戦いのための船を浮かべてはならない」といった歌詞で想像できるように、静かな反戦歌。

(2) 次の「さとうきび畑」も同様に反戦歌であり、森山良子が歌ったのがよく知られているが、このCDではまた異なるアレンジがなされて印象的。

(3) 「心の瞳」これは飛行機事故で亡くなった坂本九の遺作。

(4) 「千の風」これはアメリカ・イ

ンディアン<sup>インディアン</sup>の死者から生者へのメッセージだという。悲しむな、私は、墓の中で眠っているのではなく、秋の雨となり、星となり、朝の光となり、千の風となっているのだから…といった内容の歌詞である。

(5) 「平和の扉」これは、イラクのフセイン政権崩壊後に愛唱されてきたという平和の歌。

(6) 「死んだ男の残したものは」これは、一九六五年に東京で開かれた「ベトナムの平和を願う市民集会」のために作られた。武満徹<sup>たけみち</sup>作曲、谷川俊太郎作詩という、著名な人による作品。

こうした社会的な平和を願う歌とともに、(8)「安かれわが心よ」のような、シリア<sup>シリア</sup>作曲の霊的な平和を歌った讃美歌もある。これは、讃美歌21の五三二番。

(9) 「鳥の歌」これはスペインのカタロニア<sup>カタロニア</sup>民謡で、キリストの降誕を鳥たちが歌って祝う、というクリスマススの讃美。スペインの世界的なテコロ奏者、カザルスが、ケネディ大統領の招きで、国連でこの曲を演奏し、その時、私の国の鳥は

「peace, peace, (平和、平和)」と鳴くと行って、平和を強く訴えた。この歌は、新聖歌九四番に収められています。(10)「勝利を望み」キング牧師の公民権運動のテーマソングとして歌われた。讃美歌21の四七一番。

北田演奏のピアノ曲としては、(14) バッハの「来れ、異教徒の救い主よ」、(11) メンデルスゾーンの「慰め」、(13) バッハ作曲の「シチリアーノ」。これは、バッハの作として知られるフルートソナタの数ある楽章の中でも、もっとも親しまれてきた名曲。なお、シチリアーノとは、地中海のシチリア島に起源を持つ民族舞曲の名称で、独特のリズムを持っているもの。

(15) リストの「祈り」など。全体として見ると、社会的平和と心の平和に関する曲、さらに「心の瞳」や、「千の風」のような叙情的と言える歌なども交え、また、イラク、ベトナム、インディアンの関係する歌といった、グローバルな内容で、曲の

選択に苦心した後が伝わってきます。

このような、社会的な平和を求め、多方面の広がりをたたえつつも、信仰的平和の曲をも含め、大衆的な歌手であった坂本九の歌とともに、バッハの宗教音楽も同時に収めていて、しかも、一人が歌を歌うと共に、ピアノ演奏もしているCDというのは珍しく、得難い内容のCDと思います。

主がこのCDを、御国のため、平和のために用いられますようにと願います。

このCDの定価は三千円(送料当方負担)。近くに店がないとか、何らかの理由で購入するのが難しい方は、吉村(孝)まで連絡頂ければ、お送りできます。

CDのタイトルは「心の瞳」

CDのNo. AEGC-1008・

発売元(株)アットマーク

販売元(株)

ユニ



バーサル・ミュージック  
編集だより

○七月二十九日(土)〜三〇日

(日)に、京都市の洛西にある、桂坂にて、第六回近畿地区無教会キリスト教集会が開催されました。参加者は、大阪、京都、兵庫、広島、徳島などから、約四六名ほど。今回は、「道」というテーマでした。

開会礼拝では、「キリストの道」を主題として、大学四年の那須容平兄が、プロジェクターを用いて、イエスの歩んだ道を、

視覚的に分かりやすく解説、ガリラヤの道と題して、宮田博司兄、十字架の道と題して那須佳子姉、共に歩む道と題して宮田咲子姉たちが語りました。

そのあと、坂岡隆司兄が、

「からだね館」開設に関してみ言葉を引用しながら語り、夜はグループ別に読書会と夕拝とに分かれての集会となりました。

翌日の主日礼拝では、「神の道」と題して吉村(孝)が聖書

講話を担当。全体として、主の御手のはたらきを実感するよき集会となりました。

○高知の森下貞猪姉が天に帰られました。八十一歳でした。

結婚後、小児麻痺の子供をなんとかよい治療をとあちこちの病院に連れていっているうち、ご自身が結核になり、徳島県の結核療養所に入院、そのゆえに離婚も経験され、さまざまの苦しみや悲しみを通して来られた方の方です。

しかし、その苦しみのさなかの間のなかに、徳島の伝道者柚友豊市や時々東京から来訪される政池仁らによってキリストの光に触れるようになり、その後もずっとキリストの力により、歩んで来られたお方でした。

東京から高知に帰られてから、四国集會でお会いすることもあり、主にある交流がなされるようになりました。

また、折りにふれて葉書での通信もあり、きちんと毎年協力

費とともに、そこに信仰に関するコメントもいつも添えて下さり、そうした交流を通して離れていても、信仰によって固く立ておられる方、主をみつめて歩んでおられる方だと感じていました。

若いときから、晩年に至るまでの様々の苦しみや悲しみをも信仰によって乗り越えて来られた方であり、老年に至るまで、主に導かれ、主に担って頂いていると感じておりました。

・読者の方からの来信です。

○何年前の住み慣れたところからの移住の際に、示されました、ヨシユア記の「…これまで通ったことのない道であるが、あなたたちの行くべき道はわかる」との約束のみ言葉は、この間、いつも私の心の中にとどまっています。

今、改めて、ヨハネ福音書のCDで十三章36節〜十四章(☛)にかけて学び、「行くべき道」を確かに、そしてこれから将来

も、いかなることに逢おうとも、それは揺るぎなき道であるとの、聖書講話に慰められました。示されたみ言葉を思い起しつつ、今日も感謝に満たされております。

(\*)シモン・ペトロがイエスに言った。「主よ、どこへ行かれるのですか。」「わたしは、どこへ行くのか、その道をあなたがたは知らない。」  
トマスが言った。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしには分かりません。どうしてその道を知ることができませんか。」「イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」

・私たちの人生の歩みの中で、何かに導かれ、支えられていきます。その際、神の言葉によってそのような導きと支えを与えられる人は多くいます。神の言葉はその奥に、神ご自身がおられ、神の言葉を胸に覚えて歩む

ことは、神ご自身の御手に引かれて歩むことになるからです。

○高槻での集会のこと

八月二〇日(日)の午後から行なわれた、高槻市の集会(那須さん宅)で、思いがけない人が参加していました。大学時代の同じ理学部、化学科の同窓生、しかも私は生化学の専攻でしたが、彼はそれと近い関係のあった、放射線化学の専攻でした。卒業以来、何十年も経っていたために、すぐには思いだせなかつたのですが、そのうちに記憶が部分的ですがよみがえってきました。

那須 容平さんが、最近はじめたホームページで、自宅での高槻集会を紹介していたのですが、それを見て、高槻市に在住であったため、電話で問い合わせがあったという事です。彼は、キリスト教の集会や教会には参加し

たことはなかったのですが、今回が初めての参加という事でした。しかも、彼は岡山県の高専卒業で、そこで、香西 民雄氏(岡山聖書集会)に、高校時代に教わったとのことでした。

主は必要なときには、予想もしてなかった人や書物、あるいは出来事に出逢わせて下さるのを実感しました。

また、ホームページが用いられていることを感謝。私どもの徳島聖書キリスト集会のホームページも、東京や沖縄のそれまで全く知らなかった人との出

会いに用いられたことを感謝。私どもの徳島聖書キリスト集会のホームページも、東京や沖縄のそれまで全く知らなかった人との出



(ハイマウ)

をこもい

徳島聖書キリスト集会案内  
・場所は、徳島市南田宮二丁目一の47  
徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日(日曜日) 礼拝 毎日曜午前  
十時三十分から。

(二) 夕拝 毎火曜夜七時30分から。

毎月最後の火曜日の夕拝は移動夕拝で場所が変わります。(場所は、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市国府町のいのちのさと、吉野川市鴨島町の中川宅)です。

☆その他、読書会が毎月第三日曜日午後一時半より、土曜日の午後二時からの手話と植物、聖書の会、水曜日午後一時からの集会が集会場にて。また家庭集会は、板野郡北島町の戸川宅(毎週月曜日午後一時より)と水曜日夜七時三十分よりの二回)、海部郡海南町の讀美堂・敬度宅(第二、第四火曜日午前十時より)、徳島市国府町(毎月第一、第三木曜日午後七時三十分より)「いのちのさと」(作業所)、板野郡藍住町美容サロン・ルカ(笠原宅)、徳島市応神町の天室堂(網野宅)、徳島市庄町の鈴木ハリ治療院などで行われています。また祈禱会が月二回あり、毎月一度、徳島大病院8階個室での集まりもあります。問い合わせは次へ。

代表者(吉村)宅 電話 050-1378-3017

著者・発行人 吉村孝雄 〒777-0101 小松島市中田町字西山九一の一四 電話 050-1378-3017 「いのちの水」協力費 一年 五百円(但し負担随意)

郵便振替口座 〇一六三〇一五―五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集会 協力費は、郵便振替口座が定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って下さい。

(いのちの水) いずれも郵便局で扱って下さる。 E-mail: pistis77@bb.ne.jp http://pistis.jp FAX 08858-2-3017

